

<資料>

評価する教育方法とその修得上の課題 —学生が持つ教育方法観の分析をとおして—

白石 淳*

抄録：教科に関する専門性・指導力に優れた教員を育成するためには、大学においてどのような内容の授業、指導を行えばよいのだろうか。教職課程を履修する学生は、自分自身が持つ評価する教育方法をモデルとして、それに大学で修得した知識・技術を加えながら、自己の教育方法、指導力を向上させていくものとする。そこで本稿では、教職課程を履修している学生自身が持っている評価する授業の方法の実態を示すことを目的とした。

学生が評価する授業は、「教員の個性に関する事項」「授業の展開に関する事項」「板書に関する事項」「話法に関する事項」等の項目に類型化できる。具体的には、授業内容が生徒に理解しやすい板書、わかりやすい話し方などが上位にあげられているが、その基盤には教員自身の個性などが存在し、二重構造的に形成されている。このことを踏まえ、教員養成においては個人内の到達点を明示し、学生一人ひとりに適した指導助言を行う必要がある。指導助言の際には、学生に対して望ましい教育方法観を持たせることと、学生自身が自己評価することが重要であり、教職履修カルテなどの活用により、教育方法を自ら高められるように支援を行うことが必要である。

キーワード：教育方法、教科指導、授業評価、履修カルテ

1.はじめに

都道府県・指定都市教育委員会が求める教員像で最も多くの自治体があげているのは、「教科等に関する優れた専門性と指導力、広く豊かな教養など」¹⁾である。教科等に関する専門性と指導力は、採用前のみならず採用後においても継続して高める必要があるが、最低限必要とされる基礎的な事項は養成段階における教職課程の学修等によって身に付けなければならない。各大学の教職課程においては、そのためのカリキュラム等が準備され授業が行われているが、教科に関する専門性・指導力に優れた教員を育成するためには、どのような授業、指導を具体的に行えばよいのかという疑問がある。これらを検討するためには、教職課程に在学する学生の有する力量の現状と自らが目指す力量を把握する必要があるのではないかと考える。

この現状や目指す教員として有する力量を把握する際

* 臨床福祉学科社会福祉学講座

に、「専門性・指導力のある教員」を、学生が実際にどのように捉えているのかが問題となる。なぜならば、学生が自ら求める教員像が存在しなければ、学生自身が目指す力量の到達点を設けることが難しいのではないかと考えるからである。教科の内容に関する専門性については、その力量をある程度ペーパー試験等で測り得、その到達点に近づけるように努力することができようが、教科の指導力についての到達点を学生が自分自身で明確に認識することは容易ではないと考える。しかし理想とする教員像を、「生徒と信頼関係が持てる教師」などと語ることを耳にすることから、描くことはできうと思う。その理想とする求める教員像のなかに、教科の指導力、その中心をなす教育方法の目指す到達点を内在しているのではないかと考えた。そして、その理想とする教員像を築くための具体的なモデルとする教育方法があるはずである。

我々は理想とするモデルを設ける際には、自己の経験にもとづいた理想とする人物、活動等をモデルとすることがある。生徒・学生たちは「先生自身すごい」と評することがある。この「すごい」という意味は、教育方法

等の指導力に関して言えば、これまでの経験にもとづく評価するモデルとしての教育方法等が存在することを示していることになる。そして自己の授業を展開する方法は、そのモデルに自分の学修結果、経験や理想を加えながら、また実際に授業（模擬授業等も含む）を展開することをとおして試行錯誤の上に形成されるものと考えられる。この自己の経験とは、小学校から中学校、高校において実際に授業を受けてきた経験である。すなわちそれぞれの学校教育段階において接して来た教員の授業の姿、教育方法に関する経験をおとして、自己の意識のなかに具体的な評価できる・評価できない教育方法を形成するという経験的モデルである。例えば、印象に残っている上手な授業を問うた場合、「学校の社会科で学習した方法、穴埋め。クイズ形式にした穴埋めプリントを配り、生徒が解くことができるように教師が工夫をしていた」「全員がわかるよう具体的に先生が示してくれた。実物を持って来たり」など、経験から形成された方法上のモデルを自己の意識のなかに持ち、評価する教育方法として自己の方法観を形成している。それゆえ、教員養成の段階である教職課程では、その抱いている望ましいとする教育方法観を到達点の基盤としながら、教職課程における教育方法の専門的な学修により確かなものとし、自己の授業展開の力量を育成しているのではあるまいか。

そこで本稿では、教職課程を履修している学生自身が持っている評価する教員の授業を調査・分析し、モデルとして有する教育方法の実態を示すことを目的とする。加えてその評価する教育方法を教職課程で修得するための課題についても示したい。

教職課程における学生の理想とする教育方法を具体的に示すことにより、学生の教育方法の力量の向上に繋がるとともに、教職課程における教育方法に関する履修指導上の一つの基礎的な資料になるものと考えられる。

2. 評価する授業

(1) 学生が捉える上手な授業

教育方法のモデルの形成に寄与している学生の持つ教育方法観について述べる。学校教育段階における評価する教育方法は、どのような授業を指すのであろうか。学生は「内容が充実している授業」「授業の内容が濃厚」「理解しやすい・わかりやすい授業」などと表すこともあるが、具体的な教育の方法上から捉えると、どのような要因からこれらのことが生じているのであろうか。これを示すために、過去に授業を受けた「上手な・望ましい授業（教育）方法」について、自由に記述する方法により調査を行った²⁾。

① 教員の個性に関する事項

ここでは教員自身を示すように用いられている「教員・先生」というキーワードが含まれている回答を抽出した。

- 先生次第で、授業の取り組み態度は変わる。授業は面白くなるし、勉強をする気にもなる
- 雰囲気の良い先生の授業
- 印象の強い先生だと、勉強も頭に残る
- 面白い授業は、先生も面白い人が多い。授業は先生の個性によるところが大きい
- 授業は厳しくても、先生のキャラでそれをカバーしていた
- 先生の人柄で、授業に関心が持てるなど授業が良くなる
- 先生の人柄で授業は変わる。楽しい先生の方が、授業や教え方も良かった
- 先生自身が楽しいと自然に授業もわかるし、楽しかった。授業の方法も上手い
- イケメンの先生の授業。自分から勉強に取り組むようになった
- はっきりと言うなど、しっかりしていて、さわやかな先生。自然と授業に集中した
- 先生のキャラで、授業は変わった。授業は先生によるところが大きい
- 嫌いな先生、あわない先生の授業は、どんな授業でも前向きになれなかった

教員自身の持ち得た人柄・個性を重視する内容が、ここではあげられている。方法以前の問題かもしれないが、授業自体を豊かにかつ生徒を授業に引き付けるような効用を教員の個性は持ち得ている。また「好きな先生だから、しっかり勉強した。真面目に授業を受けていた」「イケメンの先生だから授業を頑張った。頑張ったので授業も面白かったし、わかった」などのように、授業の学習環境に、教員の個性、教員の姿が影響を与えている。このような教員自体の存在という基盤があり、そのうえにそれぞれの授業の方法、教材が活かされ、評価できうる、望ましい授業としてのモデルの一つとなりうるのではないか。

② 授業全体の展開に関する事項

「授業の流れ」「展開・進め方」に関するキーワードが含まれている、授業全体の展開に関する内容の回答をまとめた。

- 授業全体の段取りが上手い
- メリハリのある授業
- 授業の流れ、進め方にメリハリがある
- 授業がなめらかでわかりやすかった。授業を飽きないで受けることができた。ポイントがわかりやすい授業
- 授業が流れるように進む。ダラダラしなくて。だから授業が良くわかる
- 授業内容の振り返りをよくする
- 集中させるときには、集中させる先生。授業を進める際に内容のヤマ、大切なポイントが生徒にわかるようにしていた
- 全体的にわかりやすい授業。授業全体を通してメリハリがあったりして、流れるようにわかりやすかった
- 授業の進め方が全体的に上手で、わかりやすい
- ONとOFFがあり、やるときはやる、気を抜くときは抜く授業

- 授業の合間に冗談を言って生徒を楽しませる。勉強をやるときはちゃんとするように厳しく指導をする
- 雑談から授業内容に繋げるのが上手い。授業に流れがあり、集中できた
- 授業が流れるようであり、生徒を引き付けられるような授業は、聞いていてわかりやすかった。今から考えると、授業の導入や展開部分などがうまいので、よく内容がわかった
- 生徒の興味を引き出す先生
- 世間話を授業中にはさむ
- 授業の最後5～10分間くらいで、早押し形式で授業に関するクイズを出してくれた

授業展開の全体に関する内容である。授業にはメリハリ・ヤマがあり、また明確に指示をしてくれるなどの「授業展開の段取り、進め方が上手」と評される授業である。難しい授業を砕いてわかりやすいように説明するなどの「授業の内容」、より具体的な教材の準備・工夫をするなどの「教材の工夫」、授業の流れが整い理解できやすくまた集中ができる「理解、集中の工夫」などがここではあげられている。授業の展開では授業のポイントを明確に示し、ポイント同士の結合の方法などを工夫していることがわかる。すなわち、授業の導入、展開、まとめが確実かつ工夫された構成ができている授業である。これらを、授業を全体的に捉えて「わかりやすい授業」「濃い授業」「楽しい学びたいと思える授業」などと評価されることに繋がっているのではないか。

③ 生徒の状況にあわせての指導に関する事項

授業の主体者である「生徒」に関するキーワードが含まれている回答を示す。言うまでもなく、授業は生徒と教員との関係性のなかで築かれるが、その生徒の理解、考え、反応等に注目しながらの授業展開がここではあげられている。

- 授業中の生徒の反応をしっかりと見ている
- 授業中に生徒の考え、意見・考えを聞きながら、生徒にあわせてくれる
- 生徒の考えをよく見ている
- 生徒にあわせた内容を考えて授業をしている
- 生徒の様子をみながら、ちょこちょこあてる
- 生徒に理解できるような、生徒にあわせて、視線に立った授業を行っている。だから生徒にわかる授業になっていた
- 生徒一人ひとりを見ている授業
- 生徒の考えを確かめながら、生徒の理解にあわせている授業
- 生徒の立場、視点に立ち、授業を進めていた
- 生徒とやり取りする先生

生徒の学習等の状況・反応にあわせて指導しているなど、生徒の理解と指導との関係性に注意を払いながら展開している授業が、ここであげられている。学習指導案の作成時に、生徒の実態を記入することがあるが、この意味は、生徒の実態にあわせた指導が、教育実践では不可欠であることを示している。なぜならば、授業は生徒の理解があつてこそ成り得るからで、生徒の実態が授業

を作る基盤にある。「生徒の学習にあわせた授業。生徒の理解を踏まえている授業を行う教師」などと示されるように、生徒本位の授業でなければならないのは言うまでもなく、この点が授業実践では重視されなければならない。学生もそのような授業を上手な、評価できる授業として捉えていることがわかる。

④ 教材の工夫に関する事項

授業は、教員、生徒とそこに存する教材・教具から構成されるが、ここではその「教材」がキーワードとしてあげられている回答を示す。

- 教材が工夫されている授業
- 考えさせるように（歴史の授業の際に、歴史上の人物が「統一」を行う単元の場合、私達生徒の座席を区切りながら説明していた）、教材などが工夫されている授業
- 教科書以外の教材を使って、よりわかりやすく理解を深めてくれる
- 授業で使う教材が、具体的（具体例をあげる）であり小学生でもわかりやすい
- 授業に配布されるプリントの使い方が上手
- 要点をプリントなどに上手にまとめて簡潔に教えてくれる
- 教科書はあまり使わないで、わかりやすいプリントを使っていた
- 実物を用いるなど（教材が）工夫されていた授業
- 具体例をあげる（説明上手）
- 教材が工夫されている。具体例も用いながら説明していた。わかりやすい授業だった
- ワークシートの作り方が上手い。生徒にわかるように、興味もてるように、工夫されていた。ほぼ毎回の授業で使用していた
- 授業では、よく日常生活にある事例を取り上げていた。事例があるとわかりやすくて、忘れない授業内容となっていた

教材の工夫では、プリントの活用、教材教具、具体的な例示方法の活用などの工夫が見られる。授業を展開する上で教材の工夫が充分になされていることからこそ、「授業が上手」「流れるように進む」「楽しい」「わかりやすい、理解しやすい」「眠くならない」などのように、授業全体的に評価がなされることに繋がる。この具体的な教材の工夫、作成、活用等が学生にとって上手、評価する授業と評価がなされている。

⑤ 板書に関する事項

板書は、授業後にもノートなどに残り、後の学習においても有益である方法であり、多くの教員は授業展開で黒板を活用して指導にあたっている。したがって上手い板書は学習効果を高く引き出し、生徒にとって評価がなされる授業展開に繋がることが期待できる。ここでは「板書」を中心としたキーワードを含むものを示す。

- 《板書の書き方》
- 板書がキレイ
- 整理されていて黒板が見やすい
- まとめられている板書。見てすぐにわかる板書
- 黒板の字が読みやすい

- 板書している時に、うまく黒板が見える
 - 板書が赤や黄色など重要度で色分けされていて、黒板がキレイにまとめられている。見やすいし、理解もしやすかった
 - 黒板がきれいにまとめられている
 - とにかく生徒にわかりやすい板書
 - 印象に残るような板書が上手い先生
 - チョークの色にもこだわり、見やすい、印象に残りやすい板書
 - 授業の内容の細かなところまで、黒板に書いてくれる
 - 絵、図を用いた板書でわかりやすい
 - 箇条書きに書かれるなど、ごちゃごちゃに書かない板書
 - 整理されている板書。大切な箇所が良くわかるように書かれている黒板
- 《板書とノート》
- 綺麗な板書。ノートに写しやすい
 - ノートが取りやすい・板書が見やすく、ノートに書けるように黒板に書く早さも適切
 - 板書がわかりやすいし、ノートにまとめやすい
 - 板書の使い方が上手。ただぼーっと板書をノートに書いていても、後でノートを見返したときに理解できる。授業後に、教科書や参考書と照らしあわせながら勉強できる。ノートに書きやすかった
 - すっきりしている、要点がわかりやすい板書は、ノートに写しやすく、後で見てもわかりやすい
 - 後でノートを見て板書内容や授業を思い出すことができる

「先に板書をばーんと書いて、後で説明をする」など、板書に関する具体的な方法が多くあげられている。板書は視覚により明確に授業内容を理解することができるし、ノートに残すことができるなど、授業・学習の中心となっている。それゆえ、上手な、理想的な授業として板書の項目が多く挙げられるのかもしれない。「わかりやすい板書」とよく言われるが、実際にどのような板書を指しているのであろうか。板書という技術においても、ここに示されているように、「文字が読みやすい」「色分けされている」「箇条書き、図式化」「板書が整理されていて見やすい・まとめ方が上手」「必要な事項がきっちりと書かれている」「ごちゃごちゃしてなくて、必要な事項がまとめられている」「ノートを書くタイミングが良い」「ノートに写しやすい」などのように、技術的な内容も多様にあげられている。これらのことが「きれいな板書」「わかりやすい板書」とここでは表されているのである。

板書、ノートは「後で見返したときでも、理解できる」と、授業後の学習に活用されるなど、その板書・ノートの機能が教員の方法上の工夫、教員の力量により十分に活かされることができる。板書は、教育方法の大きな要素であり、この板書が上手にできることが、教育方法上で高く評価される点のひとつとなっている。

⑥ 話法・説明に関する事項

板書とともに、授業展開上で大切なこととして、教員の話法・説明がある。授業、教育方法のひとつであるが、この説明が上手な教員、下手な教員は実際に存在する。上手な教員は具体的にどの点かうまいのであろうか。こ

こでは「話法」「説明」というキーワードを取り出し、まとめて示す。

- 話が面白い。教科のことだけでなく、勉強になったことがあった。内容がわかりやすいこともここに入る
- 板書しているときも上手く喋れる。ノートを写していても、話がわかる
- 興味がそそられる説明
- 興味が湧くような内容や話し方の先生
- 説明が上手な先生
- 具体例を挙げて説明がわかりやすい
- 具体的にわかりやすい説明をしてくれる
- 具体例を多く出してくれた
- 身近な話題で例を出す説明
- 授業以外の話（ニュースなど）から授業につなげてくれた。
- ゆっくりと、生徒の反応をみて説明する
- 脱線し過ぎない説明。し過ぎると、よく解らなくなった
- 話が面白い。話している内容が濃く、引き込まれるような感じがした
- 楽しく語ってくれる。脱線しても授業自体が楽しくなる話し方
- 声が聞きやすい。イントネーションが良い
- その先生の個性が出ている話し方は、人気があった。授業内容も覚えられる
- 話が明確。何を言っているかわからないときは最低
- 特徴的なトーンで発音をリピートして単語帳を読んでいるだけだったけれど、それが耳に残っていて、覚えやすい先生
- だらだらと話さない
- 大切な箇所をピシッと明確に話す
- 生徒が聞く態度のときに話す。話すタイミングが良くみんなちゃんと聞いていた
- 明確に話す。ごちゃごちゃしない。くどくない。わかるように、ポイントを説明する
- はっきりと話す
- その先生らしい特徴のある話し方がよかった

板書と同様に教員の授業の活動として、話し方の項目が高く評価されている。これは板書とともに、教員の話し方・説明は授業の中心となっているからであろう。言語による意思伝達は、授業に不可欠な事項である。「説明することが上手い」の様子は、話し方にあるのではないか。話法については、「声の質、大きさ」などの事項、「板書しながらしゃべれる」「興味がわく話し方」「ポイントを的確にわかるように話す」「タイミング」など技術的な事項も存在する。それらを総じて、「話し方が上手い」は「面白い」と示し表することが多いのではないか。教員の話法は、言うまでもないが、授業を作る重要な要因になっている。高く評価される点となっていることは、教育方法上でこのことが教員の力量として大切であることを示しているからであろう。

⑦ その他に関する事項

これまで示してきた分類以外の事項である回答を、ここで示す。

- 教室の良い雰囲気を作ったなかでの授業
- 勉強をしなければならないという雰囲気のある授業
- 授業の雰囲気をよくするような、授業を盛り上げられる先生
- みんなが一致して取り組んでいる授業

- 生徒をあてるときでも、上手く生徒の意見を引き出していた
- 授業時間中、クラスをまとめることができる
- 必要なことだけ絞って教えている
- センター試験などの出るツボを良く知っている先生
- 生徒と対話する形式で授業をしていた
- 生徒と会話するように、生徒の意見・考えを聞きながら授業をしていた

教室などの雰囲気、意欲の出る授業を創るのも教員の務めである。実際には難しいものの学習環境の整備についても、教員が工夫することが必要である。また授業の方法面ではなく、授業の内容に注目していることもある。「授業の重要な部分をまとめて教えてくれるので、よかった」と、授業内容のポイントを押さえて整理しながら授業を行う教員も評価されている。

さらに、話し方などを含めて「生徒を説得させるのが上手」「生徒を授業で納得させる」などと授業全体を捉えてみている授業、アクティブラーニングの授業も評価されている。

(2) 評価する授業の類型

高等学校の授業評価においては、例えば教員による授業観察シートでは、机上の整理等の「学習環境」、目標やねらいの明示、ICTや視聴覚教材の活用、多様な学習形態、言語活動、授業の振り返り等の「指導方法の適切さ（授業展開）」、生徒の満足感、達成感等の「個の学習の成立（生徒理解・授業分析）」が観点となっている³⁾。一方、生徒による授業アンケートでは「先生の話し方」「わかりやすい言葉」「指示や問いかけのはっきりさ」「板書や資料の見やすさ」「授業の進み方」「授業の内容」「作業する時間」など⁴⁾の項目があげられているなど、教育の技術面が中心となっている。

本稿では教職課程を履修、学修している学生の視点で、授業、教育方法を改めて見つめ直した。この結果、個性など教員自身に起因する「教員の個性に関する事項」、授業の流れなど授業全体に係る「授業全体の展開に関する事項」「生徒の状況にあわせての指導に関する事項」、授業方法に直接係る「教材の工夫に関する事項」「板書に関する事項」及び「話し方に関する事項」、教室の環境（雰囲気）などの「その他に関する事項」の項目に類型化することができた。「教員の話法」「板書」に係る内容が、評価できる授業の要因として多く挙げられていた。このことから教職課程を履修する学生は、具体的な教育の技術を求める生徒の視点と、授業全体の評価を求める教員としての視点という複眼的に評価する授業を捉えていることがわかる。加えて学生は、教員自身の個性などについても評価する授業・教育方法に影響を与えていると捉えている。このように授業展開という大きな流れとしての方法、具体的な技術、その基盤にある教

員自身の個性を評価の対象としている。

3. 授業展開力の向上

(1) 教育方法観の形成

学生は各々過去に出会った教員から望ましいと捉える授業の方法を認識し、自己の教育方法観としている。評価する魅力ある授業は、教職課程を履修する学生にとってモデルとなる存在である。評価できる授業は教員自身の魅力ともなりうる。「魅力ある」の重要性は、中央教育審議会答申においても指摘されており、平成19年度文部科学白書「魅力ある優れた教員の確保」⁵⁾において、次のように記されている。「教職に対する強い情熱、教育の専門家としての確かな力量、総合的な人間力を備えた魅力ある教員を確保していくことがますます重要」と示され、教員養成については「使命感や子どもへの愛情を持ちながら、現場の課題に適切に対応できる、力量ある教員の養成を図る」とされている。とくに「確かな学力と豊かな心、健やかな体などの『生きる力』の育成や、いじめ、不登校など学校教育を巡る様々な課題への対応などの面で、優れた資質能力を備えた魅力ある教員の確保は、ますます重要となる」としている。実際に、「連載 魅力ある教師となるために」⁶⁾で取りあげられたり、「2015教職シンポジウム in 旭川～魅力ある教師を目指して～」⁷⁾他でシンポジウムが開催されるなど、「魅力ある教員像」に関しての重要性が注目されている。

その魅力ある教員となりうる要素のひとつとして教育方法の上手さや魅力がそこに内在し、教職課程を履修している学生も自己の経験的なモデルをもととして学び修得している。そしてモデルの基盤となる最低限の授業を展開する力量を、大学の教職課程の在学中に身に付けるように努めることになる。授業については、魅力ある教育方法を経験的モデルに加えながら新たな到達目標を作りあげ、自分なりの新たな教育方法を自己の意識のなかに構築することが必要である。このための指導助言を、教職課程において行うことが必要不可欠である。教職課程で学修する教育方法等の学修や新たな教員との出会いなどにより、魅力ある授業ができる教員像を自分自身で抱くかが、授業展開力の向上に結びつくものと考えられる。

(2) 教育方法の学修上の課題

教員養成課程においては、実際にこれらの評価する教育方法を修得できるようにするため、どのように指導助言を行えばよいのであろうか。修得上の課題について、検討をする。

平成29年度に示された教職課程コアカリキュラム案の

「教育方法及び技術（情報器機及び教材の活用を含む。）」においては、全体目標として「教育方法及び技術（情報器機及び教材の活用を含む。）は、これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するために必要な、教育の方法、教育の技術、情報器機及び教材の活用に関する基礎的な知識・技術を身に付ける。」と示され、教育方法論の到達目標として4点が掲げられている。「教育方法の基礎的理論と実践を理解している。」「これからの社会を担う子供たちに求められている資質・能力を育成するための教育方法の在り方（主体的・対話的で深い学びの実現等）を理解している。」「学級、児童生徒、教員、教室、教材など授業・保育を構成する基礎的な要件を理解している。」「学習評価の基礎的な考え方を理解している。」である。教育方法の到達目標は2点あり「話法、板書等、授業・保育を行う上での基礎的な技術を身に付けている。」「基礎的な学習指導理論を踏まえて、目標・内容、教材・教具、授業・保育展開、学習形態、評価基準等の視点を含めた学習指導案を作成することができる。」である。学生は、ここに示されている授業の技術面、授業の展開面、授業が成立するための基礎的な要件に注目をして、これを持ち合わせている授業を評価していることになる。一方、情報器機及び教材の活用である「情報器機を活用した効果的な授業や適切な教材の作成・活用に関する能力を身に付ける。」という一般目標における到達目標「子供たちの興味・関心を高めたり課題を明確につかませたり学習内容を的確にまとめさせたりするために、情報器機を活用して効果的に教材等を作成・提示することができる。」「子供たちの情報活用能力（情報モラルを含む）を育成するために指導法を理解している。」という面を、実際に学修する機会がなかったかもしれないが、評価することはしていない。

教員の板書や話法・説明は、授業の中心的な役割を果たす方法のひとつであり、授業後においてもノート等に残り、授業後の学習においても活用されるものである。養成段階である教職課程では、板書計画や板書の演習、話法の演習等は、模擬授業、教育実習等の授業で行われるものの、一定の時間数に限られているという現実がある。板書には、板書の意義、黒板の使い方、色使い、ポイントの明示方法、図式化、文章方法など様々な方法上のポイントがある。教育方法観にも示されているとおり、これらを駆使して、より見やすい、より分かりやすい板書が可能になるので、限られている状況があるものの、学生の実際に対応したきめ細かな指導・学修が必要である。教員の話法等については、授業の中で実際に演習、実習がなされる機会が乏しいものの、技術の修得が必要な事項であるのではないか。明瞭な言葉使い、説明

方法、相手に伝えるという話法等に関する力量であるが、これらは模擬授業などで不適切さなどが指摘されることはあっても、個別、全員に対する具体的な指導がなされる機会は少ないのが現状であると思われる。

授業の全体の展開の流れについては、生徒の理解にあわせるなどの教育方法上の工夫が必要不可欠である。学習指導案の作成等で授業の展開は学ぶものの、「生徒に合わせての指導」「授業に係る冗談を言いながら」「わかりやすい」などを養成段階で具体的に学修することは、現実には難しいものである。実践的な経験も乏しいなかで、学生は定型的な授業を作るのが精一杯であるからでもある。しかし授業は経験から作られると言ったとしても、養成段階でその基盤を養う必要がある。そのためには、授業や教員の教育方法を含む職務、授業展開・内容、生徒の関わりに対する想像力が必要とされるのではないか。自己の理想とする授業像を経験的モデルから想像的に形成、それをどのように実際に計画することができるのかという想像力が必要である。これを養うために、理想とする教育方法観、授業を作る方法、授業に対する自己の哲学が重要になると考える。そのためには、授業を観察・分析、それにもとづく模擬授業、実習授業の記録などを作成していくことが有効ではないだろうか。これらのことが教育方法の力量を高める上で大きな課題であり、課題に対応した全体的指導、個別指導のための学修を設ける必要があると考える。

4.まとめ

本稿では学生が抱く評価する授業に関する経験的モデルを示し、個性など教員自身に起因する「教員の個性に関する事項」、授業の流れなど授業全体に係る「授業の展開に関する事項」、教育方法に直接的に係る「板書に関する事項」及び「話法・説明に関する事項」などの項目に類型化して整理を行った。学生が抱く教育方法のモデルは、授業内容を生徒によりわかりやすいもの、理解しやすいものとするような板書、話し方などが上位を占めているものの、その基盤には教員自身のパフォーマンスが影響を与えており、二重構造的に形成されていることを示すことができた。また、授業の全体の展開の工夫、生徒にあわせた指導等についての評価もあるが、これは授業を受けている立場である児童生徒の頃には気づきにくい点であるものの、自己の授業を展開するうえでは重要な要素になる。学生は力量形成のために、このモデルに教職課程の専門的な学修により自らの授業像を形成することになる。それぞれ評価する教育方法観を有するので、教職課程における教育方法の向上を考えると、この現実を踏まえ、学生の理想とする教育方法・技術の

修得のために、どのような事項をどのように教員養成の授業や指導助言において反映していくのかが重要となる。

以上のように、教員養成段階における学生の持つ教育方法観を明らかにすることができた。これらをもととして、どのように教員養成課程において学生を指導助言するのが、次の課題となる。教職課程としても個人内の到達点とあわせて養成上の到達点を明示し、そこに至るまでの学生一人ひとりに適した指導助言を行わなければならない。この指導助言の際には、学生に対して望ましい教育方法観を持たせることと学生自身の自己評価が重要になると考える。そこでは、現在使用されている教職履修カルテ⁸⁾を活用するなどの個別指導も有効ではないだろうか。学生自身の授業・教育方法観を大切にしながら、力量向上に関する自己意識を持たすための教育指導が必要である。教育方法は、養成段階終了後の教育現場における授業の成否に繋がる重要な事項であるゆえ、学生自身が理想とする方法観を活かしつつ、教育方法を自らいかに高めていけるように教職課程において支援を行うのが、今後の課題となる。

注・引用文献

- 1) 2番目に多くの自治体が挙げているのは「教育者としての使命感・責任感・情熱、子どもに対する深い愛情など」、3番目は「豊かな人間性や社会人としての良識、保護者・地域からの信頼など」である。(平成22年度文部科学省調べ 平成22年度に実施された教員採用選考検査試験の募集要領等に記載された教育委員会が求める教員像より抜粋)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo11/001/shiryo/_icsFiles/afildfile/2011/09/26/1309293_04.pdf
- 2) 学生44名に対して、同意を得たうえで回想法による自由記述により実施した。実施時期は平成24年9月、平成25年9月、平成26年9月、平成27年9月、平成28年9月、平成29年9月である。
- 3) 平成25年3月の大阪府教育センターの「高等学校の授業評価に関する研究 ―高等学校授業改善に向けた授業評価の在り方―」などがある。
- 4) 青森県教育委員会の「生徒の視点を生かした授業評価についての研究 ―高等学校における授業改善への活動の可能性―」、飛内文代、高坂智、久保田千夏などが

みられる。(http://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-gakyo/files/kenkyuu.pdf)

5) 文部科学省(2008)『平成19年度文部科学白書』日経印刷、90-100。

6) 『教育新聞』2015.4号。

7) 平成27年12月4日 キャリアセンター旭川校センター運営委員会の企画による。

8) 履修カルテに教育方法に関しても記述するなど、自己の到達点を具体的に示す項目を設けることも考えられる。

参考文献

浅海純一(2013)「高等学校の自己評価における『生徒による授業評価』の有効性に関する研究」『政策研究大学院大学教育政策プログラム』

道田泰司(2011)「教員養成課程学生は大学在学中にどのように変化するか? ―思考態度および授業観の縦断的变化に基づく検討―」『琉球大学教育学部紀要』78、71-83

「魅力ある教員を求めて」

(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301/001.pdf)

松平信久、横須賀薫編(2000)「新訂教育の方法・技術」教育出版

松島るみ、尾崎仁美(2012)「大学授業観が学習意欲・大学満足感に及ぼす影響1 ―学業に対するリアリティショックを媒介として―」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』42、105-118

(<http://www3.grips.ac.jp/~education/wp/wp-content/uploads/2014/04/201201.pdf>)

宮下俊也、森長はるみ(2001)「音楽教育専攻学部生の音楽授業観 ―「中等教科教育法(音楽)」における模擬授業の分析・評価を通して―」『教育実践総合センター研究紀要』第10巻、51-58

篠原正典、宮寺晃夫編(2012)「新しい教育の方法と技術」ミネルヴァ書房

山地弘起編著(2007)「授業評価活用ハンドブック」玉川大学出版部

吉本均(2006)「現代教授学の課題と授業研究」明治図書出版

Study of teaching method that students regard as a model

Jun SHIRAISHI

Abstract : In this study, I examined how teaching methods should be taught in the teaching training course at university to produce high school teachers with excellent teaching skills. University students enrolled in the teaching training course learn how to give lessons by recalling excellent teachers by whom they were taught in high school. Students say that their teaching method was great in their use of the blackboard, how they moved through lessons and how to spoke to students, for example. Students consciously keep their teaching method in mind as a model while trying to improve their own teaching skills by adding knowledge and techniques acquired at university. With this as a background, it is important to understand the teaching method that students regard as a model and to give them guidance and advice on that basis. In other words, it would be necessary to give students a view on desirable teaching methods based on the model that students hold, and to give lessons and encourage students to achieve that goal and to evaluate themselves-daily on their achievements in the teaching training course at university. For that purpose, the use of learning charts should be effective in the lessons on teaching methods.

Key Words : Teaching method, Subject lesson, Student evaluation of teaching, Learning chart